

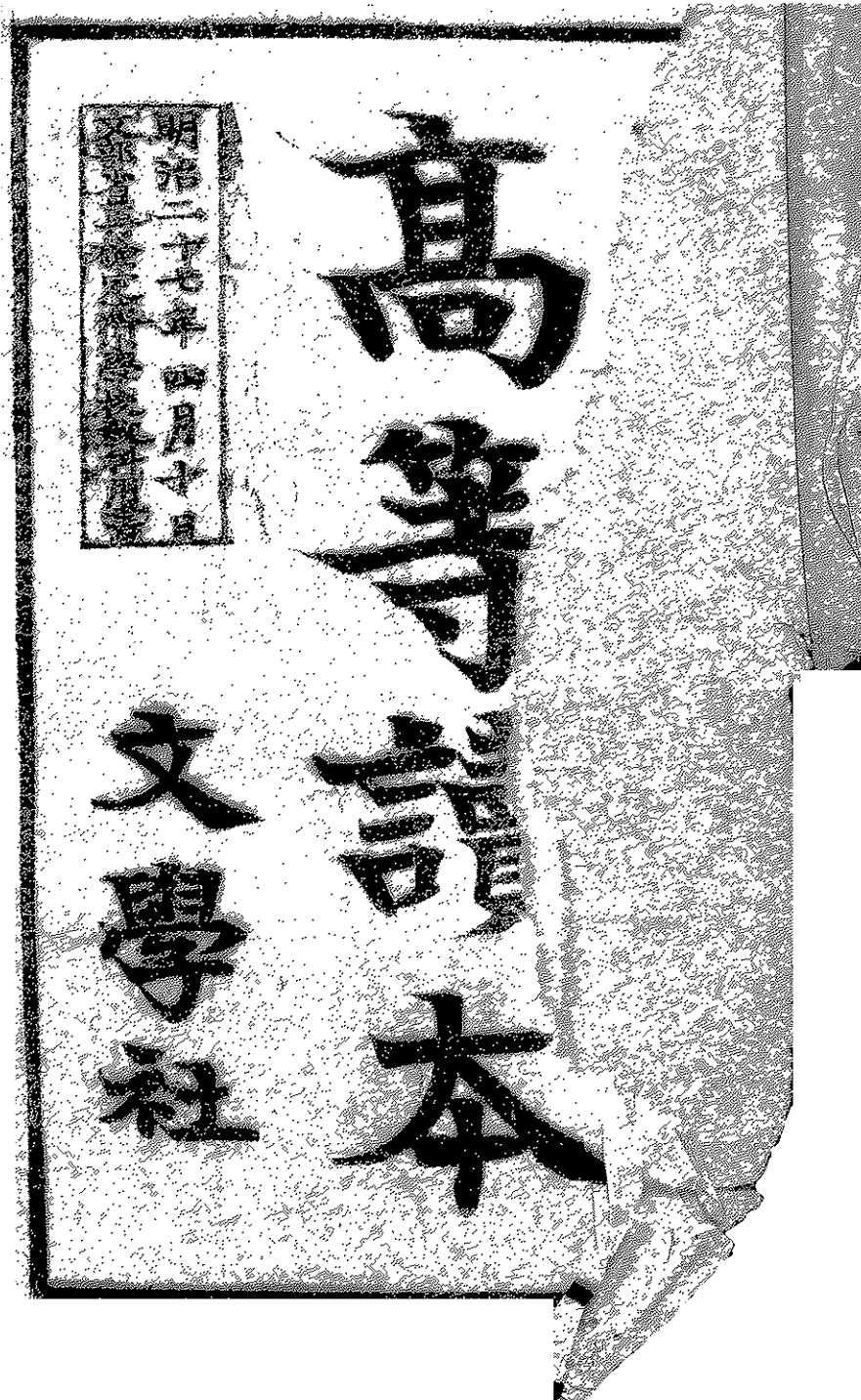
高等讀本
山縣悌三郎編纂

七

三思考

十六

T1A3
10
Y 22



高等讀本

明治三十七年四月十日

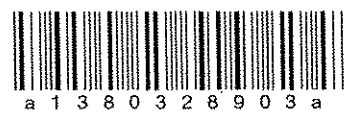
文学社

高等讀本卷之七

目次

第一課	王政復古	一
第二課	五條の御誓文 其一	四
第三課	五條の御誓文 其二	五
第四課	節義 貝原篤信	八
第五課	源平ノ三烈士 室直清	九
第六課	楠正行の母の事 中村之欽	十三
第七課	風雅の心 荻生徂徠	十五
第八課	加賀の千代 三熊思孝	十六

圖書 和圖書 遡



福岡教育大学蔵書

第九課

絲亭川柳

十七

第十課

忠度都落ちの事

平家物語

十九

第十一課

手折リシ枝ニ吹ク春風

室直清

二十一

第十二課

衣服の分限

三省錄

二十二

第十三課

親族を睦しくす

中村之欽

二十四

第十四課

慈惠の樂

貝原篤信

二十六

第十五課

井伊直孝ノ秘訣

室直清

二十七

第十六課

己をゑらず

橘成季

二十八

第十七課

傳書鳩

其一

二十九

第十八課

傳書鳩

其二

三十二

第十九課

近松門左衛門

三十五

第二十課

孝女白菊の歌

其一

三十八

第二十一課

孝女白菊の歌

其二

四十二

第二十二課

孝女白菊の歌

其三

四十八

第二十三課

孝女白菊の歌

其四

五十一

第二十四課

少年鼓手

其一

五十四

第二十五課

少年鼓手

其二

五十六

第二十六課

熊澤蕃山傳

湯淺元禎

五十九

第二十七課

伊豆の海

瀧澤馬琴

六十三

第二十八課

空中旅行

其一

六十四

第二十九課

空中旅行

其二

六十五

第三十課

空中旅行

其三

六十六

高等讀本卷之七

第一課 王政復古

王政復古の大業は鎌倉將軍頼朝以來七百有餘年の間武家にうつりゝ政權と兵權とを併せて朝廷に収めたまひしことにあれば固より一朝一夕の事ならず。數十年前よりはやくその氣運にむかひゝにより上は王公より下は草莽の士に至るまで慷慨氣節の人々つぎゝ出來て國體を説き名分をあきらかにゝ一方には外

國の刺衝をうけ時勢漸く熟して斯のとき大
變革を見るに至れるなり。

れもへば今を距ること二十六年のむかへ慶
應三年十月十四日のことにてありき。時の將軍
徳川慶喜上表して政權を奉還せんことを請は
れたり。是に由りて朝廷にても種々評議ありて、
翌十五日詔を下してその請願をゆるしたまへ
り。是れ中古以來數百年間武家に移りし政權を
王室に復し鎖國の國是を革めて廣く海外諸國
に交通し遂に立憲政治の基礎を定めたまふに

至る起原なり。

偕其十二月の九日には從來の官職攝政關白
征夷大將軍議奏守護職所司代等を廢して更に
總裁議定參與の三職を置せられ總裁には熾仁親
王議定には純仁法親王以下若干名參與には大
原重徳以下の公卿及び徵士若干名を登庸して
之に任じたまへり。是れ王政復古朝廷組織の第
一着なり。此時の詔に曰く

自今以後大小ノ政令天下公平ノ議ニ從ヒ之
ヲ裁スルニ衷ヲ以テス。爾衆庶宜ク之ヲ體シ

テ以テ報國ノ誠ヲ效スベシ。

となり。かゝりゝかども人心未だ定まらず。猶不
穩の勢ありゝが、竟に明治元年正月の元日より
四日まで、慶喜が帥ゐるところの兵と官軍と、京
都大阪の間にて戦争するに至れり。此時議を決
して、嘉彰親王を征討大將軍に拜し、錦旗節刀を
賜ひ、官軍を總督して、慶喜を討たしめたまふ。慶
喜東走するも及びずの官爵を削り、大に東征の
師を起し、諸藩の兵を徴し、更に熾仁親王を拜し
て征討大總督と爲し、錦旗節刀を授けたまひき。

斯の如く國內多事にして、人心恐懼の念をな
すの秋に際しては、宸襟を悩ませたまふこと一
方ならず。乃ち二月二十八日、天皇親しく列藩諸
侯を召させられ、詔してのたまはく。

朕夙ニ天位ヲ紹ギ、今日天下一新ノ運ニ膺リ、
文武一途公議ヲ親裁ス。國威ノ立不立蒼生ノ
安不安ハ朕ガ天職ヲ盡スト盡サバ、ルトニ在
レバ、日夜寢食ヲ安ンゼズ、其心思ヲ勞ス。朕不
肖ト雖モ、列聖ノ餘業先帝ノ遺意ヲ繼述シ、内
ハ列藩萬姓ヲ撫安シ、外ハ國威ヲ海外ニ耀サ

シコトヲ欲ス。然ルニ德川慶喜不軌ヲ謀リ、天下解體、遂ニ騷擾ニ及ビ、萬民塗炭ノ苦ニ陷ラントス。故ニ朕已ムコトヲ得ズ、斷然親征ノ議ヲ決セリ。且已ニ布告セシ通り、外國交際モコレアル上ハ、將來ノ處置尤モ重大ニツキ、天下萬姓ノ爲ニ於テハ、萬里ノ波濤ヲ凌ギ、身ヲ以テ艱苦ニ當リ、誓テ國威ヲ海外ニ振張シ、祖宗先帝ノ神靈ニ對ヘント欲ス。汝列藩朕ガ不逮ヲ佐ケ、同心協力各、其分ヲ盡シ、奮ヒテ國家ノ爲ニ努力セヨ。

あゝ萬乗の至尊にねはゝます大御體を以て、天下萬姓の爲には、萬里の波濤を凌がせられ、親ら艱苦にあたり給はむとの御心の程ころ、いともかゝこく辱なきことにはありけれ。

第二課 五條の御誓文 其一

維新創業の功臣諸卿が、海には水漬屍となり、山には草生屍となりて、王事に勤勞し、内外多事の秋に際して、克く立憲政治の基礎を鞏くし、皇室を泰山の安きに置くことを得たるは、顧ふに

高等讀本 卷之十 四一
主として次に掲ぐる所の五條の御誓文に基づくものなりとはいへども、是れ併ながら、今上天皇敬聖文武の盛徳を備へさせられ、加之名臣賢相等、獻替する所亦皆其道を得たるの結果により、ずんばあらざるなり。

明治元年の三月十四日には、天皇南殿に出御まゝく、公卿諸侯を率ゐて、天神地祇を祭らせ給ひ、五事をあげて誓はせ給へり。其御誓文に曰く、

一、廣く會議ヲ起シ、萬機公論ニ決スベシ。

一、上下心ヲ一ニシテ、盛ニ經綸ヲ行フベシ。

一、官武一途、庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。

一、舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ。

一、智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ。
因りて詔してのたまはく、

我が國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先シ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯國是ヲ定メ、萬民保全ノ道ヲ立テントス。衆亦此旨趣ニ基キ、協心努力セヨ。

總裁始め公卿諸侯より出したる御請書は左の如し。

勅意宏遠誠ニ以テ威銘ニ堪ヘズ。今日ノ急務永世ノ基礎此他ニ出ヅベカラズ。臣等謹ミテ勸旨ヲ奉戴シ死ヲ誓ヒ黽勉從事冀クハ以テ宸襟ヲ安ンジ奉ラン。

第三課 五條の御誓文 其二

これにつぎて衆庶を撫安し國威を宣揚するの詔を下し給へり。其略に曰く

朕幼弱を以て猝に大統を紹ぎ爾來何を以て萬國に對立し列祖に事へ奉らんやと朝夕恐懼に堪へざるなり。窃に考ふるに中葉朝政衰へてより武家權を專らにし朝威は倍衰へ上下相離るゝこと霄壤の如し。かゝる形勢にて何を以て天下に君臨せんや。今般朝政一新の時、に膺り天下億兆一人も其處を得ざる時は皆朕が罪なれば今日の事朕自ら身骨を勞し心志を苦め艱難の先に立ち古列祖の盡させ給ひし蹤を履み治蹟を勤めてこそ始めて

高等讀本 第六十一
天職を奉りて億兆の君たる所に背かざるべき。往昔列祖萬機を親らゝ不臣のものあれば、自ら將としてこれを征し給ひ、朝廷の政總て簡易にして、此の如く尊重ならざるゆゑ、君臣相親みて、上下相愛し、德澤天下に洽く、國威海外に輝きしなり。然るに近來、宇内大に開け、各國四方に相雄飛するの時に當り、獨り我が邦のみ世界の形勢にうとく、舊習を固守し、一新の効をはからず、朕徒に九重の中に安居し、一日の安きを偷み、百年の憂を忘るゝときは、遂

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ。
一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。
一、舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ。
一、智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ。
因りて詔してのたまはく、

我が國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ジ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯國是ヲ定メ、萬民保全ノ道ヲ立テントス。衆亦此旨趣ニ基キ、協心努力セヨ。

總裁始め公卿諸侯より出したる御請書は左の如し。

勅意宏遠誠ニ以テ威銘ニ堪ヘズ。今日ノ急務永世ノ基礎此他ニ出ヅベカラズ。臣等謹ミテ勅旨ヲ奉戴シ死ヲ誓ヒ電勉從事冀クハ以テ宸襟ヲ安ンジ奉ラン。

第三課 五條の御誓文 其二

これにつぎて衆庶を撫安し國威を宣揚するの詔を下し給へり。其略に曰く

朕幼弱を以て粹に大統を紹ぎ爾來何を以て萬國に對立し列祖に事へ奉らんやと朝夕恐懼に堪へざるなり。竊に考ふるに中葉朝政衰へてより武家權を専らにし朝威は倍衰へ上下相離るゝこと霄壤の如しかゝる形勢にて何を以て天下に君臨せんや。今般朝政一新の時、に膺り天下億兆一人も其處を得ざるどきは皆朕が罪なれば今日の事朕自ら身骨を勞し心志を苦め艱難の先に立ち古列祖の盡させ給ひし蹤を履み治績を勤めてこそ始めて

高 等 讀 本
天職を奉りて億兆の君たる所に背かざるべき。往昔列祖萬機を親らゝ不臣のものあれば、自ら將としてこれを征し給ひ、朝廷の政總て簡易にして、此の如く尊重ならざるゆゑ、君臣相親みて、上下相愛し、德澤天下に洽く、國威海外に輝きしなり。然るに近來宇内大に開け、外國四方に相雄飛するの時に當り、獨り我が邦のみ世界の形勢にうとく舊習を固守し、一新の効をはからず、朕徒に九重の中に安居し、一日の安きを偷み、百年の憂を忘るゝときは、遂

に各國の陵侮を受け、上は列聖を辱め奉り、下は億兆を苦めんことを恐る。故に朕こゝに百官諸侯と廣く相誓ひ、列祖の御偉業を繼述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を經營し、汝億兆を安撫し、遂には萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富穡の安きに置かんことを欲す。汝億兆舊來の陋習に慣れ尊重のみを朝廷の事となし、神州の危急を知らず、朕一たび足を舉ぐれば、非常に驚き、種々の疑惑を生じ、萬口紛紜として、朕が志をなさ

らしむるときは、是れ朕をして君たる道を失はえむるなり。汝億兆能く朕が志を體認し相率ゐて私見を去り、公義を探り、朕が業を助けて、神州を保全し、列聖の神靈を慰へ奉らうめば、生前の幸甚ならん。

右。

御宸翰の通廣く天下億兆蒼生を思食させ給ふ深き御仁惠の御趣意に付、未々の者に至る迄敬承し奉り、心得違無之、國家の爲に精々其分を盡すべき事。

第四課 節義

古語ニ「忠臣ハ二君ニ仕ヘズ、烈女ハ兩夫ニ更ヘズ」ト曰ヘリ。君子ノ道、節義ヲ守ルヲ重シトス。節義トハ臣ノ君ニ仕ヘ、婦ノ夫ニツカフルニ、一筋ニ忠節義理アリテ二心無ク、二君ニ仕ヘズ、兩夫ニ改メズ。モシ不幸ニシテ我ガ身艱難ニ苦ムトモ、君ヲ棄テ夫ニ背キテ身命ヲ惜マズ。命ヲ失フトモ、忠貞ノ志ヲ改メザルヲ云フ。萬ノ事イミシク、才能アリテウルハシキ人モ、節義ヲ失ヒテ、

君ニ叛キテ難ヲノガレ夫ヲ棄テ、人ニ從ハ、
其餘ハ見ルニ足ラズ。一タビ節義ヲ失ヒテ利ア
ル方ニ就キ、害アル方ヲ遁レ、或ハ死スベキ時ニ
死ナザレバ、一生ノ名ヲ汚シ、後代迄モ永キ惡名
ヲ流ス。凡ソ人生前ノ血肉ヲノミ我ガ身ト思フ
可カラズ、死後ノ善惡ノ名モ亦我ガ身ノ内ナル
事ヲ思フ可シ。生ケル者必ズ一タビ死ナズト云
フコト無シ。節義ヲ失ヒテカヒナキ命ヲ生キ、假
令百年ノ齡ヲ保チ富貴ヲ極ムトモ、人ノ道ヲ失
ヒテ世ニ生ケルカヒ無クバ、何ノ樂カ有ラン。是

レ人ノカメ行フベキ大節ナリ。

貝原篤信……………大和俗訓

第五課 源平ノ三烈士

渡邊競ハ源三位入道賴政ガ所從ノ士ニハ第一
ノ者ナリ。然ルニ治承年中、賴政高倉宮ヲ勸メ
テ兵ヲ起シ、時京師ヲ急ニ發シテ、倉皇トシテ
三井寺ヘ赴キシガ、打チ忘レテヤアリケン、競ニ
カクト知ラセザリシ程ニ、競暫ク猶豫シテ家ニ
在リシテ、平宗盛聞キテ、日頃競ガ魁偉ナルヲ見

恩忘レ難ク候ヘバ此度死ヲ共ニ致スニテ候フ。御門前ヲ空シク打テ過ギンハ本意ナク候ヘバ御暇ヲ申シ候フトテ三井寺ニ至リテ賴政ト一所ニナリシガ其後宇治橋ノ合戦ニ潔ク討死シテケリ。

彌平兵衛宗清ハ平賴盛ノ士ナリ。平治ノ亂ニ賴朝幼少ニテ賴盛ノ家ニ囚ハレシヲ賴盛ノ母老尼清盛ニ乞ヒテ死ヲ救ヒケリ。其時宗清賴朝ヲ朝夕ニ勞ハリシガ平家西國ヘ落チシ時賴朝力子テ賴盛ニ通問シテ疎意ナキ由ヲ云ハセケ

レ人ノカメ行フベキ大節ナリ。

具原篤信……………大和俗訓

第五課 源平ノ三烈士

渡邊競ハ源三位入道賴政ガ所從ノ士ニハ第一ノ者ナリ。然ルニ治承年中賴政高倉宮ヲ勸メテ兵ヲ起シ、時京師ヲ急ニ發シテ倉皇トシテ三井寺ヘ赴キシガ打チ忘レテヤアリケン競ニカクト知ラセザリシ程ニ競暫ク猶豫シテ家ニ在リシヲ平宗盛聞キテ日頃競ガ魁偉ナルヲ見

テ己ガ所從ニセマホシク思ヒシガ頼政ガ親臣ナレバ請フ可キヤウモ無カリシニ此度競一人都ニ殘リシト聞キテ六波羅ニ參レト人シテ言ハセケレバ參リケリ。

宗盛對面シテ汝今ヨリ我ニ仕ヘバ入道ノ恩ニハ勝ルベシトテ小糟毛トイフ馬ニ具鞍置キ乘リ替ヘノ料トテ遠山ト云フ馬ヲ引キ添ヘ黒絲ヲドシノ甲冑マデ皆具シテ給ヒケリ競畏マリ給ハリテホクソ笑ヒシテ罷リ歸リヌ。

一族家人打チ寄リテ入道殿是レ程ノ大事ヲ

思ヒ立チ給フニ一人取殘サレシハ眞實ニ遺恨ナリ大將ノ斯ク懇ニ語ラヒ給フハ辭ミ難シ時ノ花ヲカザシニセヨトイフ事モアレバ只此儘ニテアレガシト云フヲ競否トヨ勇士ノ義サハアラズトテ宗盛ヨリ給ヒケル鎧着テ小糟毛ニ乘リ郎等七騎打チ連レテ三井寺ヘトテ打チ出デシガ六波羅ノ門前ヲ通リシ時馬ニ乘リナガラ門ノ内ヲ覗キツ、高聲ニ云ヒ入レケルハ競コソ只今下シ賜ハリシ馬ニ乘リテ三井寺ヘ罷リ越シ候ヘ御眷顧ヲ蒙リ候ヘドモ三位入道ノ

恩忘レ難ク候ヘバ、此度死ヲ共ニ致スニテ候フ。
御門前ヲ空シク打テ過ギンハ、本意ナク候ヘバ、
御暇ヲ申シ候フ。トテ三井寺ニ至リテ賴政ト一
所ニナリシガ、其後宇治橋ノ合戰ニ潔ク討死シ
テケリ。

彌平兵衛宗清ハ平賴盛ノ士ナリ。平治ノ亂ニ、
賴朝幼少ニテ賴盛ノ家ニ囚ハレシヲ、賴盛ノ母
老尼清盛ニ乞ヒテ死ヲ救ヒケリ。其時宗清賴朝
ヲ朝夕ニ勞ハリシガ、平家西國ヘ落チシ時、賴朝
力子テ賴盛ニ通問シテ、疎意ナキ由ヲ云ハセケ

ル程ニ、賴盛獨一門ニ背キテ都ニ留マリケリ。

其後平家未ダ亡ビズシテ、西海ニ在リシ時、賴
朝舊恩ヲ謝セン爲ニ、賴盛ヲ鎌倉ニ招キシガ、宗
清ヲモ必ズ召シ具セラルベキ由ヲ云ヒオコサ
レケレバ、賴盛關東ヘ赴クトテ、宗清ニ「イザ連レ
テ下ラン」ト云ヒシニ、宗清云ヒケルハ「賴朝某ニ
下レト候フハ、定メテ昔ノナジミヲ思ヒ出デ、
所領引キ出物ナドシテ、當時扶助セシ勞ヲ報ゼ
ントノ事ニテアルベク候フ。今更源氏ニ諂ヒテ、
其蔭ニ依リ候ハンハ、西海ニアル朋友ドモノ承

ル所モ口惜シクコソ候へ。君ハ斯クテ都ニ御安
塔シオハシマシ候へドモ、御一門ハ何レモ西海
ニ流落シ給ヒ、日夜安キ御心モアルマジク候フ
コ、ニテ想ヒヤリ奉ルモ痛ハシクコソ候へ。鎌
倉ニ御越シ候ヒテ、賴朝某ガ事ヲ尋子ラレ候ハ
、折節勞ハル事アル由ヲ仰セラレテ給リ候へ
トテ、鎌倉ヘハ行カザリケリ。其後西海ヘ下リケ
ルニヤ、其終リヲ知ラズ。

伊藤祐清ハ、伊藤祐親ガ第二子ナリ。賴朝伊豆
ニ流謫ノ時、祐親ニ依リテオハセシガ、祐親禁衛

ノ役ニ當リテ、京師ニ赴キシ間ニ、祐親ガ女ニ一
男ヲ産マス。祐親京師ヨリ歸リテ、後之ヲ聞キテ
大ニ怒リテ、其男ヲ殺シケリ。賴朝ヲモ害セント
スルヲ、祐清悲ミテ、賴朝ヲ深ク愛護シ、密ニ遁レ
去ラシム。其後賴朝兵ヲ起シテ、伊豆ヨリ相模ヘ
赴キシ時、祐親平家ノ御方トシテ、大庭景親等ト
石橋山ニ至リテ、賴朝ヲ襲ヒケリ。

其後賴朝既ニ東國ヲ平定シ、自ラ大兵ヲ率井
テ駿河ニ至ラレシ時、祐親ヲ生ケ捕リテ至リシ
ヲ、其罪ヲ決スルマデ、祐親ヲバ、祐親ガ婿三浦義

澄ニ預ケラレ、祐清ヲ召シ出シテ、勸賞ヲ行ハレ
ントアリシニ、祐清唯御恩ニハ早ク殺サレ候ヘ
父囚ハレテ、其子勸賞セラル、法ヤ候フ。若シ我
ヲ殺シ給ハズバ、平家ニ歸スベシト云フニ、サレ
バトテ、我ヲ救ヒシ者ヲ殺スベキヤウナシトテ
赦シテ放チ遣リケリ。祐清其レヨリ直ニ京師ニ
奔リテ平家ニ屬シ、後篠原ノ合戦ニツヒニ討死
ヲ遂ゲ、リ。

此三人時代モ大カタ同ジク志節モ相似タリ。
清風高義源平ノ間ニ求ムルニ其類スクナク覺

ユ。

室直清……駿臺雜話

第六課 楠正行の母の事

建武の末、楠判官正成、攝津の國湊川にてうた
れぬ。豫てより此度の軍を最後と思ひ定めけれ
ば、其子帶刀正行十一歳になりけるを、櫻井の宿
より故郷へかへしけり。正成うたれて後尊氏其
首を故郷へたれくられ、かば妻子家人ども正成
の兵庫に赴きし時、言ひ置ける事どもによりて、



正行の母の其子自の客を止むる

思ひ設けし事なれども、今其首の色變り目塞がりたるありさまを見て、胸悶え目くらみて、涙の色もかはるばかりなり。正行は流るゝ涙を袖に抑へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪みて、あたひゆきて見れば、父が記念に残し置きける菊作の刀を抜き持ち、袴の腰

を押下げて、既に自害せんとす。母走り寄りて取り付き、涙と共に言ひ聞かせけるは、梅檀は二葉より芳しく、頻迦の鳥は卵より諸鳥にすぐるといへり。汝稚くとも父の子ならば、なかばかりの理に惑ふべき。汝兒心にもよく思ひ見よ。故判官殿兵庫へ赴き給ひし時に、汝を櫻井の宿よりかへし留められたるは、跡とむらはれん爲めに、も非ず腹切れどの事にしもあらず。正成運命盡きて討死すとも、主上いつ方にれはしますと承らば、残りたる一族郎等どもを扶持し置き、て軍

を起し朝敵を亡ぼして再び主上を御世に立て参らせよと言ひ置かれしを聞きて我にも懇に語りつるがいつの間にか忘れたるや。さる志にては父の名を失ひ君の御事にも立つまじきぞと諫め止めて刀を奪ひ取りければ正行は禮盤の上より泣倒れ母と共にぞ歎きける。

その後より正行父の遺言母の教訓心に染め肝に銘してはかなき手ずさび戯れぬさにも朝敵を攻ふせ討取る眞似より外の事無し。母かひくく育てあげて一族家人をも懇に情をか

け置きけるによりて正行廿四歳に及びける時南方より軍を起して討出で父に劣らぬ武畧をなしけるも母の力によりける事と見ゆたり。

中村之飲………姫鐵

第七課 風雅の心

理學好む人武學好む人詩文の學は無益なりとて誹る人あり。僻陋の見なり。古より猛將勇士歌をよみ詩を作り文雅の名傳はる人こそ多けれ。風雅の心なき人は鄙野無骨にて武德も全か

らず助けにこそなるべけれ何の害かあらん。又
理學好む人の詩文を誹るは學問固陋にて大道
の旨に達せぬ故なり。不學詩無言也と孔子曰ひ
き。古の詩と今の詩と體こそかはれ詩の徳は殊
なることなり。文雅の心なき人は固陋偏僻にて
君子の域に入りがたし。先づ詩を學び夫より文
章を學び文辭の道に通ずれば六經古書も總て
聖賢の道も是より入ることなり。詩文何の害か
あらん專ら務むべきことなり。

養生徂徠……讀國談餘

第八課 加賀の千代

千代女は加賀の松任の人にて幼きより風流
の志ありて俳諧を嗜む。然れども其師を得ず。
是れ彼れ行脚の人に問ふに、いづれも美濃の盧
元坊を稱すること皆同し。是に於て殊更に行き
て學ばんと思へるに、折りしも盧元坊行脚して
此地に來りしかば、其旅宿に就きて相見えんと
どを乞ひ志を述べ、元草臥れたりどて寢てあり
し所へ行きて、教へを求むるに、さらば一句せよ

と云ふ初夏の頃なれば杜鵑を題とす。頓て句を吐きたるに、元其のただものならざる氣韻を見て、其句を肯はず。是れは誰れもすべき所なりと云ふ。さらばとて又一句を吐く。猶肯はざること初めの如く、元は既に眠りに就けども千代女は猶去らず沈吟す。其眼の覺めたるを伺ひては、又一句を問ふ。斯くて數句に及び、遂に曉天に至る時、元起きて、終夜去らざりしや、夜は明けたりやと驚く。時に千代女

杜鵑杜鵑とて明けにけり

と云へりければ、大に之を賞し、是なり、是なり、汝此意地を忘るゝことなくば、他日其名天下に振はん」とて師弟の約を爲せり。後果して女流に珍しき此道の高名となれり。これはまた少女の時なりけらし。

三熊思孝………續近世略人傳

第九課 綠亭川柳

俳諧の一體に俗談を交へ、滑稽に諷刺を寓するを川柳點の狂句と稱す。代々の點者を綠亭川

柳と號すればなり。今に傳へて八世に至る。五世川柳は天保年中を盛りにて經たる人なり。本姓水谷氏通稱を金藏といふ。父は勘十郎とて、佃島に住みかすかに世を渡る者なり。が金藏の幼時勘十郎歿して生業のたづきなさま、その母金藏を伴ひ、同島の太平治といふへ再嫁せり。金藏義父實母に仕へて至孝奉養極めて厚かり。に見る者涙を落せりとぞ。長ずるに及びて家職を勵み節儉を勉め。かば家漸く富裕になりぬ。天保のはじめ諸國凶作にして米價騰貴し細民

の難澁見聞に忍びざる有様なりければ、米錢を施し貧民を救へる事、前後數回なり。

金藏幼年の頃は薄命なりければ、習字讀書もせざりしが、長じて深く之を耻ぢ、年三十一にて始めて始めて家業の暇に文字を習ひ、かな書の文を讀み初めて、次第に漢字をも見覚え、いよく精神を勵まし、學び行く程に、遂には漢文の意をさとり、ほぼ經史に通じ、三綱五常の旨趣をも會得し、ひとりつらく考ふるに、此里の人、海濱に成長して漁業を専とすれば、粗暴の舉動のみ多き

高野 讀本 卷之十 十八
を身不肖ながら聊か聖賢の道をも悟りぬ之を
獨り樂まんも本意なし相識る人の子弟を招き
て物語りするうちに十の一をも訓へんには吾
が幸のみならず彼がためにも益とならんと思
ひつきて家業の暇近き邊のたれ彼を招き世談
によせて忠孝貞節の趣きを説諭しけるに諸人
之を喜び郷中の惡風自から改まりて金藏の德
を仰ぎ尊ぶもの多かりき此事竟に官に聞えて
天保三年白銀三枚を褒せられき

安政五年八月十六日享年七十三にして歿せ

り。金藏成年の後始めて文學を習ひくと雖も晩
年業成りて諸人を導き教訓の書數十部を著述
するに至り川柳の名跡をつぎて一流の師とな
りしも奮發と勉強との結果なりけらし。

第十課 忠度都落ちの事

薩摩守忠度は何處よりか歸られたりけん侍
五騎童一人我身ともひた甲七騎取て返し五條
の三位俊成の卿が許にれはして見給へば門戸
を閉ぢて開かず忠度と名乗り給へば落人歸り

來れりとして其内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ馬より飛でれり。自ら高らかに申されけるは、これは三位殿に申すべき事ありて、忠度が参て候。假令門をば明けられずとも、此際まで立より給へ。申すべき事の候と申されたりければ、俊成の卿、其人ならば苦くかるまゝ明けて入れ申せとて、門を明けて對面ありけり。事の體何となう物哀れなり。薩摩守申されけるは、先年申し承てより後はゆめく疎畧を存ぜずとは申しながら、此二三ケ年は京都の騒ぎ國々の亂れ出來、剩へ當家の

身の上に罷り成て候へば、常に参りよる事も候はず。君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日早盡き果て候。其につき候ては、撰集の御沙汰有るべき由承て候ひし程に、生涯の面目に一首なりとも御恩を蒙むらうと存候ひつるにか、る世の亂れ出來て、其沙汰なく候條、唯一身の歎きを存ずるにて候。此後世靜まつて撰集の御沙汰候は、是に候卷物の中に、さりぬべき歌候は、一首なりとも御恩を蒙ふつて、草の蔭にても嬉しと存候は、遠き御まほりところなり。参

高橋 源本 卷之十 二十一 四
らせ候はんずれどて日來咏み置かれたる歌ど
もの中に秀歌とおぼしきを百餘首書き集めら
れたりける巻物をいまはどて打ち立たれける
時是を取りて持たれたりけるを鎧の引合せよ
り取り出で俊成の卿に奉らる。三位之を開いて
見給ひてかゝる忘れかたみどもを給はり候上
はゆめく疎畧を存すまじう候。扱も只今の御
渡りころ情も深うあはれも殊にすぐれて感涙
抑へ難うこそ候へとの給へば薩摩守屍を野山
に暴さは暴せ浮名を西海の波に流さは流せ今

は浮世に思ひ置くことなし。さらば暇申してど
て馬に打乗甲の緒を締めて西を指してぞ歩ま
せ給ふ。三位後を遙に見送て立たれたれば忠度
の聲と覺ゝくて先途程遠馳思於雁山之夕雲と
高らかに口吟み給へば俊成の卿もいと憐れ
に覺えて涙をれさへて入り給ひぬ。其後世靜ま
つて千載集を選せられけるに忠度のありし有
様言ひれさし言の葉今更思ひ出て哀れなりけ
り。伴の巻物の中にさりぬべき歌いくらも有り
けれども其身勅勘の人なれば名字をばあらは

されず故郷の花といふ題にて咏まれたりける
歌一首ぞよみ人知らずとて入れられたる。

さゝ浪や滋賀の都はあれにゝを

むかゝながらの山ざくらかな

其身朝敵となりぬる上は子細に及ばずといひ
ながら恨めゝかりし事どもなり。

平家物語

第十一歌 手折リシ枝ニ吹ク春風

盛衰榮枯ハ世ノ常ナリ其ニ由リテ志ヲ變ヘ

ヌハ是レ亦士ノ常ナリ。モシ時ノ模様ニ就キテ
覺悟ヲ變ジ世話ニ云フ襟元ニ付クヤウニテハ
何ヲ以テ士ト申スベキ。

水邊楊柳麴塵絲。立馬煩君折一枝。

唯有春風最相惜。慇懃更向手中吹。

是レ唐ノ楊巨源ガ楊柳ノ詩ナリ。此三四ノ句意
婉ニシテ面白ク覺ユ。因リテ其意ヲ翁ガヨメル
歌ニ。

なれて吹く

なごりや惜しさあをやぎの

たをりし枝をしたふ春風。

楊柳ノ人ニ折ラレテ、ハヤ木ヲ離レタリトテ、春風ノ其ヲ餘所ニシテ吹キナバ、如何ニ情ナカルベキヲ、猶其手折ル手ヲ去リヤラデ惜ミ顔ニ吹クコソ最優シク覺ユレ。古ヨリ忠臣義士ノ盛衰存亡ヲ以テ心ヲ變ヘヌニ喩ヘツベシ。

室直清……談叢雜話

第十二課 衣服の分限

衣服といふものは、元來寒暑をふせぎ膚をあ

らはさぬをもて禮とするものなり。あしくとも寒暑をだに凌ぎたらばすむ事なり。常服は何程も分限よりさげても苦しからず。表向の衣服は、分限相應なるべし。孔子も禹王を賞し給ひて、惡衣服而致美於黻冕とのたまへり。これは禹王の常服をあしくして、たもて向の禮服を屹ときらびやかにしたまひしとの事なり。禹王は天下の主にましまして、常服たりとも美麗にし給へばとて、分限に過ぎたるとは言ふべからず。然るに常服をば、殊の外ひきさばあしきものを着し給

ひしことなり。況や諸侯より以下をや。

れよう大丈夫たるものは貴賤によらず衣服の美惡などに心を用ふるものは心の向ふ所賤くきなり。左様の心にては大事に任ずることは成り難きなり。唯道を求むるに專なるべし。何事にてもこれに專なればかれにうとく彼に詳なれば此に畧せずしては叶はざる事なり。孔子も士志於道而耻惡衣惡食者未足與議也といましめ給へり。然るに諸侯の世子などははぐめ奥むきにて女中の手に育ち給ふ故に衣服のよしあ

しに目を附けもの好みなどし女中のきる模様または時のほやりもやうなどの好みあるは大につたなき事なり。これ畢竟はそのはぐめ婦人の手にそだち給ふ弊なり。

殊に高貴のかたの小兒は年のほどよりくすみたる衣服はれとなしやかにて其家風も厚く奥床く見ゆるものなり。時のほやり模様さればみたるは賤しくその家風も何となく見れどさるゝものなり。婦人は小兒のあてやかなるを愛しはなやかなるを好みて男子をも女子かま

たは芝居役者などいふ賤しきものゝやうに、こゝろへするもあり、見る目も耻かしきことなり。

志賀忍……………三省録

第十三課 親族を睦しくす

宋の范文正公宰相となりて、我が親族の數甚だ多く、これを我より見る時は、親しき有り、疎き有りと雖も、先祖より見たまふ時は、等しく皆子孫にして、更に親しき疎きなく。我が家先祖の功德世々に積みて、今福の開くる時に當りてかゝる

大官に昇れり。若し我一人のみ榮をうけて、ゆかりの者の飢寒をも助くる事無くば、何の面目ありてか。死して先祖に見え、今も家廟を拜まんやとて、俸祿の餘を出して、縁の中の貧しき者に、悉く分け與へけり。又義田、義宅といひて、其料に田を充て、宅を建て、年月の衣食のものとめ、禮義の費など有る可かく計らひ置きて、力を添へ、身を救ひし者數知らぬまで有りけりとぞ聞にし。我が國にも、昔藤原良相大臣、崇親院を建て、藤氏の居處無き者を置き、延命院をたて、其病

あるものを養へり。

唐の張公藝が家九世までに一族住居を別たず高宗皇帝此事をめで思しければ山祭し給ふ御序に其家に行幸ありて公藝を召して親族を和ぐる道如何なる事有りやと問はせ給ひければ公藝たゞ忍の字ばかりを百字餘書き付けて奉りけり。忍は堪忍なり其心にれもへらく一門の内尊きも卑しきも老いたるも若きも萬の事堪へ忍びて怨みどがむる心無くば家どこしなへに和ぐ可しとなり。

隋の郭世雋が家も親族相和ぎて七世までに住む家の鳥獸も其ならはしに習ひて犬豕はたがひに子を養ひ鳥と鵲と共に巢をかはしけるとかや。

又南唐の陳褒は十代を歴て宗族七百餘人まで一の家に住みあたり若きれとなしきが次々に並び居て日毎の食を共にす其家の犬數百許もありけるが常にひとつのをりに居て物を分け喰ひ若し一も來らざればのこりの犬ども待ち居て喰はざりけるとなん其後宋の陳兢までに

又八代續きて義門と號せられしなり。

中村之欽……姫鑑

第十四課 慈惠の樂

世の中に同じく人と生れて飢寒ゆる人亦多し。其不幸哀むべし。我が身餘財あらば斯る貧人に施し救ひて自ら樂み人をも樂まうむ可し。人世の樂みは自ら善を樂み人を救ひて善をするに越にたる樂みは無し。奢りて益なき事に財を多く費すは浮氣のなすわざなり。甚だ惜む可し。

能く思ひて樂みにはあらざる事を悟るべし。富める人の奢りて一日一事に費す財を用ひなば千萬人の飢を助くるにも猶餘ある可し。然れば百人の飢を救ふは財多く費さずしても救ひ易くて其益大なり。是を以て大富人ならずとも仁心だにあらば眼前に飢寒えぬるを助くる程の惠は行ひ易かるべし。況や富貴厚祿の人は多くの人の飢を助くる事甚だ易き事になん侍る。只志の無きを耻ぢて財の足らざるに言を寄すべからず。

第十五課 井伊直孝ノ秘訣

寛永ノ頃ニカ有リケン、永井信濃守尙政累リニ昇進シテ寵任セラレケルガ、其比井伊掃部頭直孝、一代ノ元老ニテオハセシニ、或ル時邂逅シテ、我等事弱年ノ身ニテ特恩ヲ蒙リテ重職ヲ勤メ候フ事誠ニ至極ト申ス可ク候フ。其許ニハ御老功ノ御事ニテ候ヘバ、我等心得ニモ成ル可キ事思召寄モ候ハ、仰セ聞カセラレ候ヘト有レ

バ、掃部頭先ヅ感シテ、奇特ナル御心得ニテコソ候ヘ、イカニモ一ツ存寄リタル事候フマ、傳授シ候フベシ。サレドモ大切ナル事ヲアカラサマニハ申難シ。彌御聞有リ度候ハ、某ガ宅ヘ御越シ候ヘトイハレシカバ、日ヲ定メテ禮服ヲ着シ、彼ノ宅ヘ往カレシニ、掃部頭出デ、對面ノ後、世話ニ油斷大敵トイフ事定メテ御覺エアルベシ。某ガ傳授外ニハ無ク候フ。此一言ニテ候ゾ必ズ御忘レアルナト言ハレシトゾ。

第十六課 己をゑらず

楚襄王晋國を伐たんとす。孫叔敖これを諫め申して曰く、園の榆の木の上に蟬の露を飲まんとするあり、後に螻蛄をかさんとするをゑらず。螻蛄亦蟬をのみ守りて、後に黄雀をかさんとするをゑらず。黄雀また螻蛄をのみ守りて、榆の木の下に弓を引きて童子をかさんとするをゑらず。童子また黄雀をのみ守りて、前に深谷後に掘株のあることをゑらずして、身を過てり。

これみな前利をれもひて、後害を省みぬゆゑなり」と申せり。王、この時さとりを開きて、晋を攻めんといふことを思ひとまりにけり。

橘成季……古今著聞集

第十七課 傳書鳩 其一

今を距ること凡二十年前、獨佛戦争の時、巴里城は四面に強敵の重圍を受けて、味方に消息を通ずべき途を絶たれり。かば、纔に輕氣球を放ちて信を通じたれど、返信を得べき由なく、徒らに

空を望んで、使者の安否を案じ、信書の敵手に落ち
ちもせば如何あらんかと心を苦むる折柄、鳩を
携へ往き之をして使命の如何を報ぜしめなば、
城内の人々も大に安堵すべしと發議するもの
ありければ、即ち之に従ひて、第二回の輕氣球に
は鳩を載せたりけり。

斯くて午前十一時に乗り出でたるに、鳩は午
後五時に早くも巴里城に歸り來り、輕氣球の恙
なく指したる味方の地に降り、書信は夫々送達
せし由を報じたり。是より鳩を用ふるの道順に

開け、第三回の輕氣球には特に若干の鳩を載せ
之をツールなる假政府に送り、通信の用に供せ
しめたり。斯くて鳩の効用益顯はれければ、在外
遞信省にては、巴里城内への一切通信事務を負
擔し、數多の鳩を使用しけるが、圍解くるに至る
まで、城内に送入りたる公用の信書は十五萬私
用の信書は一百萬に超えたりといふ。鳩の功も
亦偉なるかな。

巴里籠城の折放ちたる輕氣球は、其數總て六
十四なりしが、其中行方知れざるもの三敵兵に

獲られしもの五、暴風に吹き去られて、ノルウェーに到りたるもの一の外、他は悉く味方の地に到着したり。此時携へ出でたる傳書鳩は、三百六十三羽なりしも、幸に鷺鳥の捕獲と、敵兵の銃丸とを逃れて、使命を果したるものは、僅に五十七羽のみ。然れども、其中には、數回往復したるものもあれば、通計七十三回の信書を運ぶを得たり。中にも、籠城の天使とて著名なる一羽の鳩は、六回までも使者の役を勤めたり。又一羽の鳩は、敵兵の手に入り、フレデリック、チャールス親王よ

り母后に献上あり。尋で四年間獨逸の王宮中に飼はれしが、一日隙を得て、宮殿を脱出し、遂に故郷巴里に歸れりと云ふ。

音信を通ずる爲めに鳩を使用する事は、巴里の圍城に始まりたるにあらず。夙に古史に散見せし所なれど、歳經たる昔物語りなれば、誠しからず思ひ居り。此折まで此鳥を通信の用に供せんとするもの甚だ少かりけるが、鳩の斯くも偉功を奏せしより、歐米の諸國にては、俄に之を愛養するの風行はれ、殊に陸軍の用に供へんとて

飼養し訓練するもの甚だ多し。

獨佛二國の軍用鳩は最も意を飼養訓練に用ひ、費用を惜まず、好種を得んことを務めたり。例へば佛國にては、甲乙二城間の通信を掌らうめんとする鳩を飼養するには、極めて釋き雛を取り來りて、先づ甲城に置き、其巢に馴れ着きたる頃之を乙に移し、又巢に馴染むまで留め置き、爾後甲にては食物のみを與へ、乙にては水のみを與ふるなり。斯れば鳩は其生活の必要の爲めに、常に兩城の間に往來するが故に、何時にても通

信の用に供するを得るなり。此一例を以ても、亦其飼養訓練の用意周到なるを知るに足るべし。

第十八課 傳書鳩 其二

鳩に書狀を齎らすには、決して古より言ひ傳へたるが如く、脚又は首に結び着くるにはあらず。斯くては遺失の虞あるのみならず、多少其飛翔を妨ぐべし。巴里城にては、初め薄紙に信を認め、之を蠟引にし、尾翼に結び、かど後には活字

を以て印刷したる信書をば極めて微細に寫眞し、之を卷き、羽軸に收めて、其尾に着けたり。是れ信書の重さを減ぜんが爲めなり。鳩は一葉ごとに凡そ二十五の通信を縮寫せる寫眞十二三枚を輸送し得べければ、一たび飛行する毎に、二百通の書狀を運送する割となるべし。斯く縮寫したる信書を読むには、日光顯微鏡、或は幻燈を用ひ、之を通常の字體に寫し取りて、受信者に配達するなり。

鳩は近年に至り、更に其用を弘めて、私信を通

ずる使者とはなれり。一刻半時の前後を爭ふ商家などに取りては、其便益最も多かるべし。又嘗て海上の通信に試み用ひし、意外の好結果を見しかば、方今歐羅巴にては、船舶にても、多く鳩を飼養することとなりぬ。

鳩は斯く通信の好使者となりて、便益を養主に與ふるのみならず、亦其快樂の具にも充てらるゝこと盛なり。歐米諸國にては、鳩の競翔を以て樂みとなすの風行はるゝこと、競馬に異ならず。されば飛行疾く、能く遠方より歸り來りて競

争に勝を得たる鳩などは其名遠近に知られ、恰も駿逸なる良馬の千里の譽れを得るに似たり。此遊戯の最も盛なるは白耳義にして、人口五分の一は熱心なる鳩の飼養者に係り、到る處鳩小屋あらざる家とてはなき程なり。是等の競翔に用ひらるゝ鳩の速力は洵に驚くべきものにて、アルスよりアントウェルプまで氣路九十九哩を一時二十分間に飛び歸りたるものあり。即ち平均の速力は一哩に付四十八秒時の割合とす。之を我が邦の里程に改算すれば一里を飛行する

に費す時間は僅に二分に過ぎず。

鳩の競翔する度ごとに其羽に出發の場所と年月とを記して其旅行の證をば留むることなり。往時は之を輸送するに不便なりしが故に、競翔の里程甚だ短かりしが近年に至り飼養の盛なると共に運送も容易になりしかば五百哩以上の競翔を試むることゝはなれり。又私信を通ずるのみの爲めに一二羽の鳩を携へんとらば之をポケットの中に入れ置くも可なり。

鳩が斯く遠方より舊所に還り來るは其配偶

高等讀本 卷之十 三十四
又は穉雛若くは其養主を慕へるが爲めにあら
ずして全く其家其巢を愛せるに由るなり。傳書
鳩は殊に所有權を主張し配偶を換ふるも其雛
を奪ひ其卵を去るも強ち哀める色なし。されど
古巢を破らざる間は新しき巢に就くを肯はず。永
く他所にありし鳩も還り來れば必ず舊の巢に
入るものなり。鳩が斯く幾百里の遠きより歸り
來るは之を天性に出づと曰はんか。是れ未だ説
明とは云ふべからず。或は地球磁氣の流に感ず
るの性あるに由れりと曰ひ或は雰圍氣の流に

感ずるが爲めなりと曰ひ臆説紛々たれども概
ね信を置くに足らず。要するに鳩に此特能ある
は視覺の鋭きと智力の勝れるとに由るなるべ
し。其腦髓の體に比して甚だ大なると傳書鳩を
相するに其眼の突出するものを撰ぶとは正に
此事實を證すべきなり。

第十九課 近松門左衛門

名は信盛通稱平馬枳森氏なり。平安堂集林子
不移山人等を別號とす。長門の人にして幼き時



長ずるに及びて、獨り謂ひらく僅に一寺の住職

肥前唐津
の近松禪
寺に入り、
僧となり
て古淵と
號す。頗る
内外典に
通じ、夙に
才名あり。

となりては、衆生濟度の利益中々に薄かるべしとて、遂に行脚に託して寺を出で、還俗して上京し、實弟岡本一抱子の家に寄寓し、或る縉紳家に奉仕して、専ら國典古學に涉り、致仕の後、傳奇小説を述べて、近松門左衛門と戲號せり。

是より先、傀儡劇盛に京阪の地に行はれ、皆淨瑠璃の戲曲に就きて演ずる風なりしが、從來の劇たる、稍時勢人情に適せざるもの多ければ、劇場主人俄に近松に請ひ、數番の新曲を得て之を演ぜしに、文章流麗趣向嶄新、世態人情に於て盡

高 等 國 本 集 卷 之 十 三 五
さざる所なかりければ、其劇大に行はれて、名聲一時に藉甚たり。されば年々の著作數百部に及び、畢、畢竟近松の傳奇を作るは、戲文を假りて勸懲の意を寓せり。されば其著はせる日本振袖始の曲には、暗に神道の大意を論じ、釋迦如來誕生會には、戲文に託して佛理を説き、國姓爺合戦には、外邦の事蹟に基きて、吾が國體を顯したりき。而して國姓爺合戦の戲曲は、海内に流布せしのみならず、長崎の譯司同文仁右衛門之を支那語に譯して彼の邦へ送り、かくここに迄もてはや

さるゝに至る。

近松の傳奇を作るや、材料富贍、文章巧妙なるは、誰も知る所なるが、曾根崎の一齣に、

此世のなごり身のなごり死に、行く身をたどふれば、あだしが原の道の霜一足づゝに消えて行く、夢のゆめこそ哀れなれ、數へゝゝて曉の七ツの鐘が六ツなりて、残る一ツが今生の鐘の響きの聞きをさめ、寂滅爲樂とひゞくなり、といへる一章あり。大儒荻生徂徠此文を見て、感歎して止まざりきといふ。又最明寺百人上臈の

曲中に雪中の景色を述べて

蝶の翼のおしろいを草にこぼして梢には鶴
の霜毛をぬきかくる雪は花より花多き

と書けるをかしこくも靈元法皇歡覽ありて其
頃歌人の聞えある公卿等を召され宣ひけるは
卿等は聞にたる秀才といへども彼の近松とや
らむには劣れるにやとて此文を示したまひこ
は圓機活法雪の部鶴毛蝶粉といふ字を掲げし
所に石曼卿が雪を詠ぜし詩を記して蝶遺粉翼
輕難拾鶴墜霜毛散未收といへり此句を國語に

翻案したる事必せりかゝる文才を以て和歌を
詠ぜんには秀逸などかなからざらんとて歡感
大かたならざりきとぞ

翁は享保九年十一月廿一日難波に歿せり後
年太田南畝彼の地に遊び翁の墓表をみし文
に翁於事情無所不盡宛然口氣感動人意其孝悌
忠信禮義廉耻之風使人興起其功偉矣と題せし
は至言といふべし

第二十課 孝女白菊の歌 其一

れいつこの寺の鐘ならむ諸行無常とつげあた
る。をりしもひとり門に出て父を待つなる少
女あり。袖に涙をれさへつゝ憂にうつむその
さまは色まだあさき海棠の雨になやむにこと
ならず。父は先つ日遊獵に出て今猶おどづれ
なうとかや。軒端に落る木の葉にもかけひの
水のひゞきにも父やかへるとうたがはれ夜な
くぬむるをりもなし。今宵は雨さへふり出
で、庭の芭蕉の音しげく鳴くなる蟲のこゑ

くいにいどあはれをそへてけり。かゝるさ
びしき夜半なればひとりれもひやたへざらむ
菅の小笠に杖とりていでゆくさまぞあはれな
る。八重の山路をわけゆけば雨はいよくふ
りあきりさらぬもあげき袖の露あはれいくた
びあぼるらむ。俄にそらの雲はれて月の光は
さしそへど父をあたひてまよひゆくこゝろの
暗にはかひりなき。遠くあなたをながむれば
燈火ひとつぞほのみゆるいつこの里かあかね
どもそれをたよりにとめてゆく。松杉あまた

立ちならびあやしき寺のそのうちに讀經の聲のきこゆるはいかなる人のれこなひか。籬もなかばやれくづれ庭には人のあともなく月の影のみさええて梢のあたり風ぞふく。門べに立ちてれこなへばかすかに應ふ聲すなり。まつまほどなく年ぬかき山僧ひとりいできたり。あばこなたをうちながめあやしみ居たるさまなりき。少女はそれとるよりもやがてまぢかくすゝみより妻はあやしきものならず父をたづねてきつるなり。あはれゆくへをも

しうらばいかでをうへて玉へかし。少女の姿をよくみればにほへる花の顔に柳の髪のみだれたるこの世のものにもあらぬなり。山僧ころやとけぬらむ少女をれくにさそひゆきぬ。はいづこのたれなるかつばらにかたれわれきかむ。をりしも風のふきすさびあたりのけしきものすごく軒の梢にむさゝびの鳴くなる聲さへきこゆなり。少女いよくたへがたく落つる涙をうちあらひ妻はもとは熊本のある武士の女なり。はじめは家もとみさかえこ、

ろゆたかにありければ、月と花どに身をよせて、
たのしく世をばおくりにき。ひと年いくさは
どまりて、青き千草も血にまみれ、ふきくる風も
なまぐさく、砲のひびきのたえまなし。親は子
をよび、子は親にあかれ、て四方八方にはし
りにげゆく。そのさまはあはれといふもあまり
あり。この時母と諸共に、そこを出で立ちあはる
く、と阿蘇のねくまでののがれきて、しばしそこ
にはすみにけり。後にしきけば、父上は賊にく
みしてまゝますといふよりいと、胸つぶれ、袖

のひるまもあらざりき。あけくれ父をまつほ
どにはやくも秋の風たちて、雲井のかりはかへ
れども、おとづれたにもなかりけり。母はおも
ひにたへかねて、やまひの床につきしより、日ご
とくにおもりゆき、つひにはかなく世をさり
ぬ。父の生死もあかぬまに、母さへかへらずな
りぬれば、夢に夢みくこゝちて、おもへば今猶
身にぞくむ。いかにつれなきわが身ぞと思ひ
かこちてありつるに、去年の春またゆくりなく
父は家にぞかへり來し。母のうせぬとき、

よりたゝにまげきてありければ世のならはし
どなぐさめてこの年月はすぎにけり。さきつ
日かりにと出でしよりまてどくらせどかへら
ねばまたもこゝろにたのみなくかゝる山路に
たづねきぬ。妻の姓は本田なり名は白菊とよ
びにけり。父は昭利母は竹兄は昭英その兄は
行ひあしく父上の怒りにふれて家出せり。風
のあしたも雨の夜も一のばぬ時のなきものを
いつこのうらにまよふらむ今猶ゆくへのしれ
ぬなり。これをきくより山僧はにはかに顔の

けしきかへものをもいはず墨染の袖をしぼり
て居たりけり。しばらくありて山僧の少女に
向ひいひけるは夜もはやいたくふけぬればあ
くるあしたをまたるべし。すゝむることばに
れのづからふかき情の見えければさすがに少
女もいなみかね一夜はそこにかりぬせり。ね
ふるほどなく戸をあけてあやしく父ぞいりき
たる。枕邊ちかくさしよりてこゑもあはれに
涙ぐみあれあやまちて谷にたゑ今は千尋の底
にあり。谷は荊棘のれひしげりいでゝきぬべ

高等讀本 卷之七 四十三
き道もな。明日さへしらぬあがいのあせめ
てはこの世のあかれにとれもふれもひにたへ
かねてなくくこにはたづぬきぬ。ことば
終はらぬその先に裾ひきどめて父上と呼ばむ
とすればあともなく窓のともゝ火影くらゝ。
夢かうつゝかあらぬかどれもひみだれてある
ほどに曉ちかくなりぬらむ木魚の聲もたゆむ
なり。

第二十一課 孝女白菊の歌 其二

夜もやうくく明はなれこゝろもなにかあ
りあけの月のひかりの影おちて庭のやり水音
すこし。少女は寺をたち出でゝまだもの暗き
杉村をたどりてゆけば遠かたにきつねのこゑ
もきこゆなり。道のゆくての枯尾花おどさや
くくにうちなびきふきくる風の身にしみてさ
むさもいとゝまさりけり。岩根こゝしき山坂
をのぼりつおりつゆくほどにみ山のおくにや
なりぬらむ人かげだにも見えぬなり。梢のあ
たりなくなるはいかなる鳥のこゑならむ木陰

をはゝるけたものは熊のたぐひにあるならむ。
こゝは高根かしら雲の袖のあたりをすぎて
ゆくわが身をのせてはゝるかと思へばいと、
おろろや。はるく四方をみわたせばやま
また山のはてもなく父はいづこにおはすらむ
かへりみすれどかひぞなき。をりしもあどよ
りこゑたて、山賊あまたよせきたりにぐる少
女をひきとらへかたくその手をいましめぬ。
あなおろろしとさけばども人なき山のねくな
れば山彦ならでほかにまたこたへむものもな

かりけり。山のかげちををれめぐり谷の下道
ゆきかよひどもなはれつ、ゆく程にあやき
家にぞいたりける。やれかゝりたる竹の垣く
づれがちなる苔の壁あたりは木々にどざされ
て夕日のかげもてりやらず。うちよりいれも
のいできたりをどめのすがたをみてよりめ
でたきえものとおもひけむほ手うちはらふさ
まにく。かねてまうけやうたりけむ酒どさ
かなをとりいでてのみつくらひつするさまは
世にいふ鬼にことならず。かゝらどおほき

ものひとり、少女のもとにさしよりて、ひげをなでつゝ、いひけるは、われはこの家のあるトなり。汝のこゝにどらはれてきたるは、ふかき縁なり。今よりわれを夫どたのみ、この世のかぎりつかへてや。わが家に久しくひめおける、いとも妙なる小琴あり。幾千代かけて、ちぎりせむ。今日のむろのよろこびに、かなでゝ、われにきかせて、ようたひて、われをなぐさめよ。かりにもいなまむその時は、劍の山にのぼらせて、針の林をわけさせて、からきりきめをみせやらむ。

少女はいなどれもへども、いなみがたくやおもひけむなく、小琴をひきよせて、いらべいでゝぞあはれなる。風や梢をわたるらむ雁や、みうらをゆくならむ軒ばを雨や、すぎつらむ岸にや波のよせくらむ。いとも妙なるしらべには、かゝこき神もまひやせむ、いともめでたき手ぶりには、ひそめる龍もおどるらむ。嵯峨野のおくにしらべたる、想夫戀にはあらねども、父のゆくへを志のおなるこゝろは、なにかかはるべき。みねのあらしか松風か、たづぬる人のことどの。

音かひとり木かげにたゝずみてきゝゐし人や
たれならむ。たづぬる人の爪音といよく心
にさとりけむゝらべの終るをりしもあれきり
ていりゝぞいさましき。刃のひかりにおうれ
けむとみのことにやおちにけむきられてさけ
ぶものもありおはれてにぐるものもあり。き
りていりにゝその人のすがたはそれとわかぬ
ども身にまとひゝはすみぞめのころもの袖ど
しられたり。あなゝく少女の手をばとり月の
影さすまどにきてなおどろきぞおどろきぞあ

れは汝の兄なるぞ。いざこまやかにかたらは
む心をしづめてきゝねかし。父のいかりにふ
れしよりこゝろにれもふことありて東の都に
のぼらむとつくしの海をば船出しぬ。あらき
波路のかちまくらかさねゝて須磨明石淡路
のしまをこぎめぐりむこの浦にぞはてにける。
こゝより陸路をたどりゝにころは彌生の末
なれば並木のあたり風ふきてころものをでに
花ぞある。都につきゝその後はたゞ文机によ
りゐつゝ朝夕ならひし千々のふみはゝめて人

の道しりぬ。父のめぐみをしるごとに、母のなさけをしるたびに、くやゝきことのみれほかれはなきてその日をれくりけり。こゝろをあらため仕へむとふるさとさうてかへりしに、いさのありゝあとなればそのさびゝさぞたゝならぬ。みあたすかぎりは野となりてむかゝのかげもあらゝふく尾花の袖もうちやつれ露の玉のみちりみたる。こゝやわが家のあとならむ、そや父母の死骸ならむてらす夕日のかげりすぐちまたの柳にからすなく。たのみすくな

さわが身ぞと思ひわぶればわぶるほどうき世のことのいとはれてかの山寺にのがれけり。朝夕讀經をすることにはかなきことのみかこたれて、よみゆく文字の數よりもゝげきは袖のなみだなり。たちまちそなたのたづねきて、どのよゝをばきゝし時、其うれしさやいかなりゝ、そのかなゝさやいかなりし。たゝにわが名を名のらむと、たもひゝかどもあかすがに、名のりかねたる身のつらさ、名のるより猶つらかりき。あかつきふかくわかれゝを道にてことも

やありなむとあどをおひきて今こゝに汝をか
くはたすけたり。そなたをたすけし上からは
こゝろにのこることもなくこの後なにのれも
てにて父にふたゝびまみれまし。かの世にあ
りてまたなむといひもはてぬに劍太刀ぬく手
もみせず一すぢにはらをきらむのさまなり。
少女はみるよりこゑたてゝかたくその手をお
さへつゝなきつさけびつなぐさむるこゝろの
そこやいかならむ。をりゝもそらの霜しるく
夜半のあらしの音たえて雲間さえゆく月影に

かりがね遠くなきわたる。

第二十二課

孝女白菊の歌

其三

四方にきこゆる蟲の音もあはれよはるとき
くほどにあり明月夜かげきえてみねのよこ雲
あかれゆく。ゝづかにそこをたち出でゝあた
りのさまをながむれば軒のまつ風聲かれてあ
れたる庭に霜しるし。手をばとられつとりつ
ゝてかたみに山路をすぎゆけば夕の賊のむれ
ならむあどよりあまたれひてきぬ。山僧それ

どしりしかば、はやくもをどめを通しやり、ひとりそこにはどまりて、きりつきられつた、かひつ。あげる林ををれめぐり、谷のかけ橋うちあたり、少女はからくにげうかどあとにこゝろやのこるらむ。きられていたではれはせぬか、兄上さきくまうませど、はるかに高ねをうちながめしのおこゝろぞあはれなる。道のかたへにあめゆひし、小祠はたれをまつらむをみだながらにぬかつきて、いのることゝろを神やしる。そこに柴かる翁あり、なくなる少女をみてしよ

り、いかにあやしとおもひけむ、こなたにあかくよりてきぬ。ことのよゝをばたづねしに、まことかなしきことなれば、翁はをどめをなぐさめて、わが家にともなひかへりけり。ふかくとざし、柴の門なかばやれにし、竹のかきかた山里のしづけさは、ひる猶夜にことならず。木々の木葉のちりみだれ、まがきの菊のいるもなく、あらしは時雨をさそひきて、むしのなくぬもいとさむし。父のゆくへに兄の身に朝夕こゝろにかゝれども、ふかきなさけにかまけつゝ、じばし

そこにはどゞまりぬ。ひまゆくこまのあしはやみ、二どせ三どせは夢の間にはかなくすぎてまたさらに、のどけき春のめぐりきぬ。み山の里のならひにて、髪もすがたもみだせども、その名におへる白菊の、いろ香はいかでからせぬべき。わか菜つみにとらちむれて、ちかき野澤にゆくみちも、ならの林に一もど、花のまじるがごとくなり。里の長なるなにかしも、ほのかにそれとき、つらむ媒人ひとりたのみきて、ながさちぎりをもとめけり。翁はいたくかくこみ

てこへるまにくゆるしたり。をどめはかくとき、ゝとき、そのおどろきやいかならむ袖もてなみだをれさへつゝ、ただになきてぞ居たりける。れもひまはせば母上の、この世をさらんろのをりに、妻をちかくめし玉ひいひのこされしことある。ある年秋の末つかたみ墓まゐりのかへるさに、つゆけき野路をわけくればしら菊あまたさきみてり。にほへる花のそのなかに、あはれなく子の聲すなり。かゝるめでたき子だからをいかなる親かすてつらむかなし

き事にてありけりと、ひろひとりしはうなたなり。菊さく野邊にてあひたるも、ふかきちぎりのあるならむ千代に八千代にさかえよと、やがてその名をれはせにき。更につぐべき事こそあれ、汝はたえてしらされど、汝の兄ともたのむべく、夫ともいふべき人こそあれ。はやく家出をなしてより、今にゆくへはあかねども、老たる父もまゝませば、かならずかへりくべきなり。かへりきたらむそのをりは、ゆくすゑかけてちぎりあひ、夫といひ妻とよばれつゝ、この世たの

しくれくりてや。母のいまはのことの葉は、今猶耳にのこるなり。いかでか教をそむくべきいかでか教にそむかれん。さはいへこゝに來てより、翁のめぐみはいとふかしく、とやせんか、と人しれず、おもひまどふもあはれなり。かれをおもひてなき、つみこれをおもひてうちなげき、おもふおもひは千々なれど、死ぬるひとつにさだめてん。をりしも媒人いりきたり、をどめにれくりしそのものは、にゝきの衣にあやのそで、實にもまばゆくみにけり。をどめのこ

ゝろのかなしさを、あたりの人はしらざらむ。み
つゝ、翁のよろこべば、隣の軀も来ていはふ。時
雨ふりきて、てる月の、かげもをぐらき、さ夜中に、
いづこをさしてゆくならん。少女は、のびて家
出ゝぬ。村里遠くはなれきて、川風さむき小笹
原死をいそぎつゝ、ゆきゆけば、水音すこくむせ
ぶなり。

第二十三課

孝女白菊の歌

其四

雲井をかへるかりがねも、小笹をわたる風の

音もにぐる少女のこゝろには、追手どのみやき
こゆらむ。胸つぶれしはいくらたび、胸いため
ゝはいくらたびか。橋のたもとに身をかくし、我
がこしかたをながむれば、遠里をのゝどもし火
の影よりほかに影もなし。下にながるゝ川水
の底のこゝろは、しらねどもあはれかなしき音
するは、少女が死をやさそふらむ。死ぬるいの
ちは惜まねど、かくとしらさむその折は、さこそ
なげかめ、父上のいかに、かこたむわか見は。父
上ゆるさせ玉ひてよ、兄上うらみなし玉ひてこ

の世をわれは先だちて母のみもとに待てあらむ。南無阿彌陀佛と言ひすて、どばんとすれば後ろよりまちてとよびて引とめし人はいかなる人ならむ。おぼろ月夜のかげくらぐさやかにそれとわかねども春秋かけてゑのびて、兄と少女はしりにけり。夢かうつゝかまぼろしかおもひみたる、さ夜中に里のゐらべのふきすさぶ笛の音遠くきこゆなり。どひとつとはれつこゝ方をき、つきかれつゆく末を一夜かたりてあかせども猶こどのはやのこるらむ。

わがふる里のこひしさに道をいそぎてかへらむと野こは山こはゆきゆけばかすみもなびき花もさぐ。日敷もいくかふる雨にぬれてやつる、たび衣家にかへりゝそのをりは五月ころにやありつらむ山ほど、ぎすなきしきりかどの立花かをるなり。しげる夏草ふみわけて軒はをちかくたちよればむかしゑのふの露ちりて袖にかゝるもあはれなり。妻戸おしあけ内みればあやしく父はましましき。こなたの驚きいかならむかなたの嬉しさ亦いかに。父上

さきくとおどなへば子等もさきくと答ふなり。ことをこまかに聞きてより父もあはれとおもひけむ兄のいまゝめゆるゝやり妹のみさを、ほめにけり。親子の三人うちつどひすぎに、事共語りあひてくむ杯のそのうちにうれゝきかげも浮ぶらむ。われあやまちて谷におちのぼらむすべもあらざれば木の實を拾ひ水のみて、長き月日をれくりにき。ある日の朝れきいで、峯のあたりをみあぐればながくかゝれる藤かつら上に猿のなきさけぶ。なくなる聲の

なにとなくこゝろありげに聞ゆれば神のたすけとよちのぼり始めてみねにのぼりにつ。嬉しとあたりを見渡せばさきのまゝらは跡もなく、木立のゝげき山かげに蟬のこゑのみきこゆなり。浮世のならひといひながらうき世の常とはいひながら人になさけのうせはて、獸にのこるぞあはれなる。父のことはをき、居たる二人の心やいかならむうれゝと兄のたちまへばたのゝと妹もうたふなり。千代に八千代といひくゝてともに喜ぶをりしもあれ後の山

のまつがにに夕日かゝりてたづそなく。

落合直文……少年國

第二十四課 少年鼓手 其一

ナポレオン第一世の伊太利を征伐せし時アルプスの高山を越にけるに、時恰も嚴冬にして積雪全山を没し、進むべき路も見えず、膝を没する白雪と耳を切る寒風とに、手足の指も今や凍り墮ちんとせり。千里の山道氷雪滑り易く、一步進めば一步退く峻路なれば、大敵を怖れざる勇

敢の佛兵も、今や生氣あるものなきに至りぬ。

然るに軍中に此風雪を事ともせず、且つ笑ひ且つ語りて、峻路を登ること春山に遊ぶが如くいと心地よげに太鼓を抛ち行くものあり、其年僅に十歳ばかりの少年なりき。顔色常に變らず、老兵の間に打ち交りて歩む様は、恰も巖石の間に咲ける草花の如く、凛々たる寒風さつと吹き來れば、啞々と高く笑ひて躍り上り、紛々たる雪鷲毛の如く散亂すれば、進撃の調子を鼓して、真先に進む。此少年の風雪を見ること、恰も戲伴の

如し。眞先に進む丈高き一武官、顧みて「ピールよ、汝が進撃の太鼓あらば吾等は何處までも進むことを得ん」と呼ばれば、少年鼓手は莞爾と打ち笑み、帽を脱して恭しく禮をなしたり。此丈高き武官は大將マクドーナルドとて、佛軍中並ぶものなき猛將なりき。

忽ちにして軍中「將軍萬歳」と呼ぶものあり、衆聲に應じて一齊に萬歳を唱ふ。其聲山谷に反響して、暫しは鳴りも止まず。其聲靜まるや否や、忽然として山の鳴る聲聞ゆ。何事ならんと、總軍足

を止めたるに、響は益高く、遂に轟々として山谷を鳴動せり。將軍高く、兵士よ、雪崩來らんとす。用意せよ」と叫ぶ聲未だ終らざるに、小山の如き氷雪の大塊、百千の雷かと思ふ響きして、山頂より落ち來り、狭き山路を拂ひ去りて、深く谷底に陥りぬ。四面は暗黒となりて、暫らく咫尺を辨ぜざりしが、雪崩過ぎ去りて、天地漸く明かなり。此雪崩の爲に勇敢なる兵士も、深谷に拂ひ落されて、影だに見えず。無慙にも萬古消ゆる期なき雪の中に、生きながら葬られしもの幾百人なるを知

五十六 五十一
高 等 讀 本
らず。幸に此難を免れたる兵士の中に、吾等の少年鼓手は何れにかあると叫ぶものあり。が憐れむべし。軍中の花は今の雪崩に散らされ。か影も形も見にざりけり。兵士等は、聲を限りに高く其名を呼びたれども、答ふるものは谷間の反響のみ。

第二十五課 少年鼓手 其二

既にして千尋の谷の底に、幽かに進撃の太鼓の音聞ゆ。其調子少年鼓手の搥つものと知られ。

かは、兵士等皆飛び立つばかりに喜びて、ピールは猶ほ恙なし。ピールは太鼓を搥ち居るなり。死に臨みて進撃の太鼓を搥てり。彼を助くべし。助けざるべからずと、各相呼はりけるが、忽ち後の方に、ピールは余救ふべと叫ぶ人あり。見かへれば、將軍にて、身は既に斷崖の上に立ち、谷底を見下し居れり。兵士は皆一齊に、將軍は控へ給へ。君は危きを冒す可からず。我等正に彼を救ふべし。君一人の生命は、吾等萬人の生命よりも重し。と叫び。かども、マクドナルドは、更に聽き入

れず。兵士は皆我が子なり。子の死せんとするを見て、父たるもの救はざるを得んや。疾く大砲の繩を解きて我か體を結び、我を谷底に釣り下せと命じたり。

兵士等は已むを得ず將軍の命に従ひ將軍に繩して遙かの谷底に釣り下つたれば、將軍は難なく谷底に下り立ちしが、此時ピールの太鼓は鳴り止みて、影も見えざりしかば、將軍は聲を上げて「ピールは何處ぞ」と幾たびも呼はりしに、ピールは半身雪の中に埋められて、微かに「將軍、余



金に固く繋ぎつけ

は此に在り」と答へたり。將軍は漸くにして近づき、固く余に抱きつけよと言へどピールは手凍へて動くこと能はざりければ、將軍は急ぎ繩をもてピールを我が

身に縛りつけ、合圖をなすければ、忽に路上に引

き上げられぬ。

兵士等が父の如くに仰ぎ尊ぶ將軍が子の如くに愛する鼓手を助けて、無事に上り來るかば兵士は歡喜に堪へず絶叫し、山震ひ谷應へ、少時は鳴りも止まざりけり。將軍は、ビールの頭を撫でて曰く、吾等兩人は嘗て戦場の火の中を馳驅せり。今又氷雪の中に危難を共にせり。以後吾等は畢生相離るべからずと。

後年戦收り、國家無事に歸ける日、佛蘭西の片田舎に清らかなる小舎を構へ、日々庭園に逍遙

する老翁あり。一人の壯年これに奉侍して、老翁の死に至るまで終始一日の如くに事へたり。これはこれ往年の將軍マクドナルドと少年鼓手ビールにぞありける。

第二十六課 熊澤蕃山傳

池田の家にて政を執り、四海にほまれ高き熊澤次郎八伯繼了介は、本姓野尻なり。加藤嘉明の士野尻藤兵衛一利が子にて、外、大父熊澤半右衛門守久、養ふて嗣となす。守久初は喜三郎といふ。

喜三郎の父は平三郎とて、尾張の人なり。東照宮に仕へ奉り、三形原にて討死しけり。守久其後、福島正則に仕ふ。正則安藝備後を削られ、信州川中島に流罪の時、正則の江戸の屋敷を圍むも、仰せを背かば、忽ち討滅さんどてなり。正則の士大かた出奔しけるが、只七人残りどまり、中に守久も留まれり。正則江戸を出て川中島に赴く時、途にて殺さるべしといひふらす。守久節をまもりて附従ひ、信州に参りければ、正則日比守久を愛する事の淺かりしを悔いけり。後水戸の威

公に仕へけり。一利は後鍋島に仕へて、島原の城



島原次郎八
中江信命を
討ふ

攻に武功あり。延寶八年八月廿三日、備前岡山に卒し、蕃山に葬りぬ。次郎八寛永十一年十六歳にて備前に來り、芳烈公に仕ふ。十三年島原一揆の

亂起りし時、公江戸におはしまし、仰せを奉りて岡

山に歸らせ給ふ。此は一揆猶落城せずば師を出されんが爲なり。此時次郎八未だ元服せざりし故、江戸に留め置かれゝが自ら元服して、潜に岡山に歸りたり。十五年岡山を去て、近江の桐原にかくれ居たり。二十四の歳、高島郡小川村にゆきて、中江惟命を師とし、道を問ひ、歸りて又高島にゆく。此時父野尻氏仕を求め、江戸に赴く。次郎八に母妹をそへて、東近江の人遠き所に殘しどゞめたりしに、家甚だ貧しくて、江州の賤き百姓の食するゆりのこ糲炊を飯とし、糠を食して、魚

肉酒茶の味をあらず。やうく、帯子を着て寒をふせぐこと五年、相ある人、母妹と、ともに餓死せんことをあはれむばかりなり。中江王陽明の書を読み、良智の旨を次郎八に語り示す。芳烈公伯繼が王佐の才なる事をあろゝめ、京極主膳に就て復た來り仕へなんやと、度々問はせ給ひければ、正保二年再び備前に參りて、仕へけり。祿三千石を賜はり、政を執りたり。和氣郡八塔寺は、備前美作播磨犬牙の如く入りまじりたる地にて、次郎八請取口とす。和氣郡の中便宜の地に因

て田を墾き士數十人を土着とす。此時伯繼を助右衛門と稱しけり。公の參勤に従ひて江戸にゆく事度々に及べり。世に名譽高く、其道を慕ふ人多し。大猷院殿其人となりをふかく信し給ひ召して尋ね問はるべき處に、慶安四年かくれさせ給ひて、謁見し奉らず。承應三年備前大に水出で、明暦元年飢饉の災あり。伯繼日夜國中を巡り撫育に心を盡す。伯繼曰比儉にして家中婢女寡くいとなむ事少し。唯客を愛して組の士朝夕となく來りて相語る。伯繼水理を論ずる事妙を得

國中水を通し沼を作り、旱魃の防ぎをなすに、みな馬上より打眺めて、其利害を定め論ずるに、數十年の後其言皆中らざるはなしといひり。明暦二年和氣郡木谷の狩に、山より倒れ落ち、此より脚を惱めり。かくて和氣郡寺口村は、其祿地なれば、蕃山と名を更めて、世を遯るゝ志あり。

つくは山葉山ふげ山うげゝれど

思ひ入るにはさはらざりけり

といふ和歌の心にて名付しといひり。病により明暦三年祿を辭し、京に赴く。此時所司代牧野佐

渡守親成議を信じて伯繼を憎む。又其才を妬む者あるによりて世に様々いひふらす事どもありて、寛文七年四十九にて大和の芳野に匿れ、この春はよゝのゝ山の山もりと

なりてころゝれ花のこゝろを

とよめるは芳野にての事なり。

又山城の鹿背山に引籠り、又播磨の明石に移り居る。延寶七年六十一歳にして大和の矢田山に匿れけり。明石は松平日向守信之の領地たるが、日向守領地を大和の郡山に移す故なり。貞享

四年八月常憲院殿の仰せにより、下總の古河にゆく。日向守領地を古河に移す故なり。日向守深く伯繼を尊信せられたり。同年の冬封事を江戸に奉り、政を更正すべき旨を申すにより、大に旨に忤ふ事ありて、永くとてこめ置くべきより仰せ出だされけり。此後人の來りて物語するにも、國政の事に及べば、かたはらなる笙をとり吹き、て、一事もいふ事なし。元祿四年八月十七日、古河の城中頼政郭に病死し、城下の大堤村鮭延寺に葬りぬ。歳七十三なり。伯繼の學朱子王子によらず

別に一種の學をなすといへども、文字に短にして、政事の才に長せること、自ら著はし、書に見えれば、爰に詳にせず。

湯淺元禎……常山紀談

第二十七課 伊豆の海

伊豆國下田の港大浦に列びて城山といふあり。昔北條家の守將清水上野が城蹟なりといふ。この山極めて好景なり。和歌の浦兒が淵御茶屋が崎など字したる處あり。この御茶屋が崎と稱

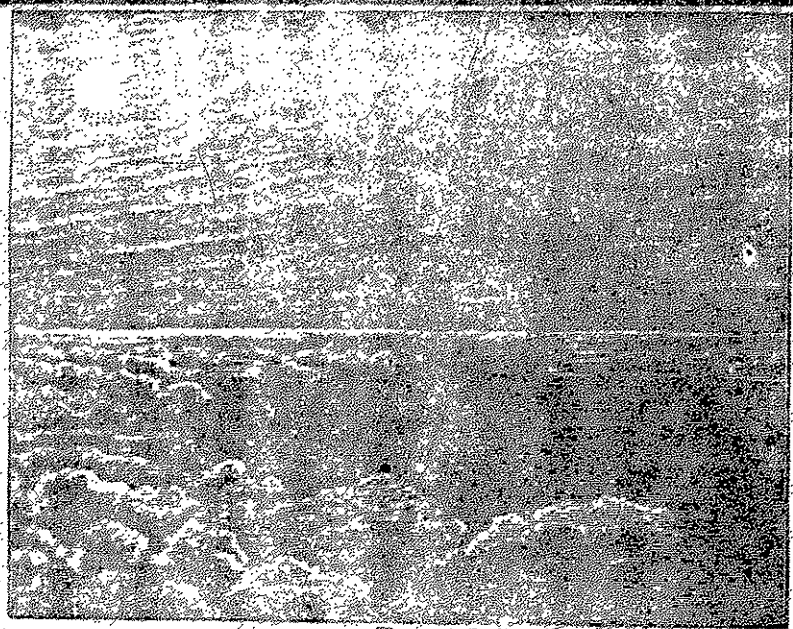
ふる處より海上迥にながむれば、奇巖突出して頂に小松の生ひ茂れるもあり。巖のれのづから虚となりて、火燈口のごとくなるあり。其間を釣する小船の漕ぎゆくありさま、畫くとも筆には及びがたかるべし。大島三宅島などの霞のひまより見にたる、打ちかへす波にむらだつ千鳥も風情あり。網引する蟹が呼聲、白帆張る舟人が棹の歌すべて、腸を洗ふ佳境なり。山は芝生にして高からず、小松が下に臥したる鹿のいかなる夢か、みるらん。石郎手石、天城の景迹は、物にも書記

高 等 本 第 二 十 八 課 空 中 旅 行 其 一
したれば此地に遊ぶ人かならず尋ねゆきて都
の人にも語り傳ふめれどこの城山はをさく
それにも劣らず。

瀧澤馬琴………燕石齋志

第二十八課 空中旅行 其一

風靜に天朗なる日に遠く天涯を眺むれば幾
多の黒子蒼々の面に散布するを見るなるべし
更に之を注視するに或は右し或は左し或は上
り或は下り或は遠く去りて其影を没し或は近



空中旅行の風景

く來りて漸く其形を明
にし而して後始めて彼
の黒子は鶯たり鴉たり
鴻雁たるを知るなるべ
し其飛ぶや忽ちにして
高く浮雲の上に出で其
降るや忽ちにして深く
窮谷の底に入り或は落
葉の舞ふが如く或は強
弩の飛ぶに似たり忽ち

然く忽ち近く千里を視ること此等に異ならず。其行くや、高嶺峻嶽も以て之を阻む能はず、長江大河も以て之を妨ぐる能はず、西せんと欲すれば則ち西し、東せんと欲すれば則ち東し、四方上下唯其意の向ふ所、其運動の快適なる、其生涯の自由なる、世間豈飛鳥に比すべきものあらんや。古今人の飛鳥を見るもの、誰か欽羨の情をからんや。誰か身に雙翼を生じて、蒼空に飛び、鵠と白雲の間に翱翔するを欲せざらんや。

然れども、雙翼は自然の備具する所、人力の以

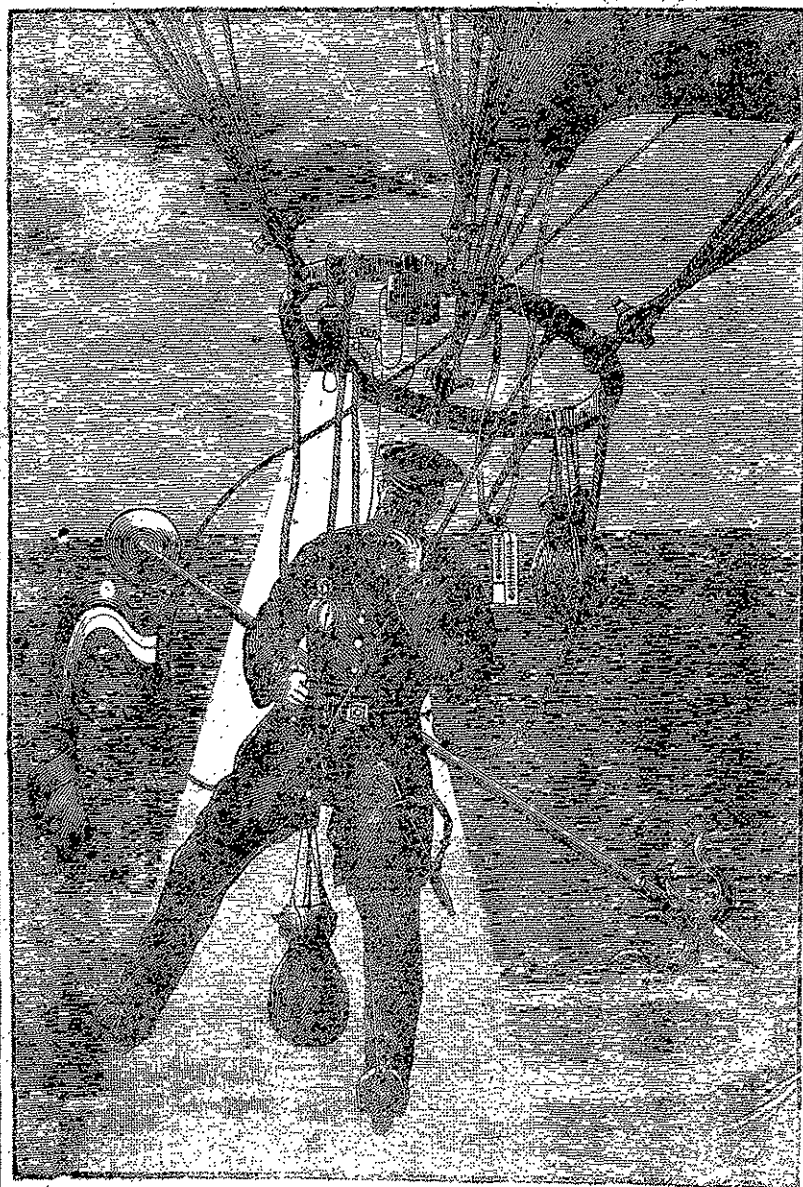
て求むべきにあらず。故に上古より最も活潑なる創造力と、最も綿密なる思考力とは、非常なる熱心の爲めに刺激せられて、空中旅行の一事に向て注ぎ來り、機巧の妙を極め、製作の精を竭し、一身を犠牲にして、飛翔の術を企圖したるもの、世々其人に乏しからずと雖も、如何せん人智の尙ほ未だ進まざる、理學の尙ほ未だ開けざる、百舉百敗、多くは慘烈なる奇禍を買ふに止まりしことを、是に於て世人の無識なる、深く其故を思はず、此等の失敗より、直に空中旅行を以て不能

爲に歸し、一二奇偉の士を除くの外は、天下復た
飛翔術の成功を信ずるものなきに至れり。然れ
ども、人間の想像力は、遂に此雲遊風旅の快樂を
撤去するに忍びざるなり。即ち古今となく、東西
となく、仙人天使の談は、到る處人口に膾炙し、苟
も幻術を説き、妖法を語るものは、皆空中飛行の
事を傳へざるはあらず。故に想像の上に就ては、
人類の大虚に來往したるもの、其數甚だ多しと
雖も、實際に在ては、古來未だ曾て一人の空中に
旅行したるものあらざるなり。

第二十九課 空中旅行 其二

斯くの如く説き來らば、諸子或は訝り問はん、
彼の輕氣球は何等の器ぞ。輕氣球に乗る客は何
等の人ぞと。此問や、其一を知りて未だ其二を知
らざるものといふ可し。蓋し世間洵に輕氣球に
乗りて空中を渡りたるもの多しと雖も、皆風の
爲めに吹き送られたるに過ぎずして、一上一下
の外は、其運動を隨意にしたるの例を聞かず。是
れ他なり。輕氣球を浮騰せしむべき空氣は、其質

甚だ輕くして、一間立方の重量僅に二貫目に過ぎず。故に尋常一人の體量即ち十六貫目の重さを載せて、空中に浮騰すべき輕氣球は、少くとも二間立方ならざるべからず。而して實際の大きは之に倍するが故に、其容積概ね三十疊の廣房に均しかるべし。此くの如く輕氣球は、其形甚だ巨大にして、其體はなほだ輕く、一進一退悉く風力に依頼せざるを得ざるを以て、西せんと欲して或は東し、右せんと欲して却て左するが如き不便を免れず。是に由て之を觀れば、輕氣球に乗



輕氣球の行

るの客は之を稱して空中に浮游すと云は、或は可ならん空中に旅行すとは決して云ふ能はざるなり。況んや輕氣球に乗じて大空を渡るの至危至險なるをや。

輕氣球の歴史は之を號して災禍の記録といふも殆ど誣言にあらず。手を折り足を挫きても生命を存するを得るをば幸とせり。且輕氣球の發明以來既に百餘年を歴たれども其改良進歩は實に遅々にして殆ど見るに足る者なく。それより後に發明せられたる氣球、寫眞術若くは電

氣諸技の進歩に比すれば霄壤の差も雷ならず。方今日進の學術を以て活動息むなき思考力を助くと雖も尙ほ改良の効を奏すること極めて微なるは蓋し輕氣球其物の性質改良を容るざるに由るなるべし。

然れども輕氣球の理に基づき適當なる進行機を備へて其運動を制するの法を設け以て完全なる飛行の具を作らんと試みたるもの少きにあらず。往年佛國に於て空中旅行會社を創立し巨萬の資財を投じ機巧の精を極めて魚形の

輕氣球を造り出だしたれども體甚だ巨大なるが爲めに風に逢へば進退忽ち據を失ひ微々たる螺旋進行器の力は以て之を制するに足らず。從來の輕氣球に比して危險更に多きを發見し、遂に其業を中止したり。此舉や洵に其當初の目的を達する能はざりしと雖も復た大に世を利したるは疑なし。何となれば工學社會は之に由て最も有益なる鑑戒を受け、爾後大に輕氣球を以て空中飛行の具に供せんと、の思念を減じ、専ら飛禽翅蟲運動の理を窮めて、之を應用せんと

の意匠を盛ならしめたればなり。

斯くの如く輕氣球は空中旅行の用を爲さずと雖も世人をして舊來の迷夢を破りて、空中旅行の爲し得らるべきを幾分か信認し、其方法を講究するに至らしめたるは主として輕氣球が空中に昇騰するを目睹したるの結果に外ならざるなり。

第三十課 空中の旅行 其三

近頃の製作に係れる水雷船は能く海中に潜

高等 讀本 第一卷 第二回
入して、魚鼈と競走を試みたり。吾人は既に水陸の二界を征服したり。豈彼の翼禽、翅蟲のみをして、獨り久しく氣界に跋扈するを得しめんや。彼得大帝の查爾斯十二世に破らるゝや、曾て憂惑恐怖の色なく、從容として曰く、「彼れ我に戰勝の術を教ふるものなり」と。益兵制を修め、終にプルトワの一戰に、大に瑞典の軍を破り、魯國をして、雄を北歐に恣にせしむるに至れり。今渠れ翼禽、翅蟲は、廣漠たる氣界を專有し、吾人が營々として地面に歩むを嘲侮するが如きも、寧ろ知らん

吾人が他日蒼空に飛翔し、彼輩を凌駕するの術は、却て彼輩が今日之を吾人に教示しつゝあることを。世の工學士、器械師等は、能く彼得の故智に倣ひ、業を敵手に受くるに恥ぢず、隼鵬の翻、蝠の翼、蜻蛉の翅、悉く精解審剖し、以て其構造を窮め、翔翔の狀、蜚翥の態、皆熟察詳覽、以て其作用を明にし、乃ち之に則り、以て飛翔の器を造らんと期せり。現に歐米の諸國に在りては、何方にも空中旅行の事業を獎賛助成する協會のあらざるはなく、最も富贍なる學識と、最も經驗ある熟

練とを以て之に従事するが故に、早晚其目的を達すべきは殆ど疑を容れざるべし。故に諸子は飛船の空を渡るを目撃すること、今日飛鳥を見るが如きものあらん。果して然らんには、後年山水を畫くもの水上の帆影、樹梢の寒鴉と與に、空際より點々現はれ來る旅行器を描くに至らんこと、是れ余輩の信じて疑はざる所なり。嗚呼、此時に至らば、誰か復た彼の飛鳥と蜻蛉とを羨むものあらんや。鴻雁の信、鳩の書、遂に施す所なく、險山千層の途、怒濤萬里の程、亦客愁を惹くこと

となからんのみ。

明治27.
e 18

明治
27
年
11
月
18
日